

佐藤直方の学問と思想に関する研究

関, 幹雄

<https://hdl.handle.net/2324/1931667>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	関 幹雄			
論文名	佐藤直方の学問と思想に関する研究			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	南澤 良彦
	副査	九州大学	教授	静永 健
	副査	九州大学	准教授	川平 敏文
	副査	九州大学	講師	井口 千雪

論文審査の結果の要旨

本論文は、江戸時代の儒学者である佐藤直方の思想と学問に関して、闇齋学派の人的交流・学派内論争に注目しながら、直方個人の思想を中心に、理気論・人性論・学問論・名分論にわたってその言説を再検討し、直方の思想構造の全体像を解明したものである。

第一章「理気に対する視点」では、理気論（太極論）の重要な定義である『易経』の「易有太極」と『太極図説』の「無極而太極」という言葉に対する直方の解釈を中心に検討し、一見、定義付けが一貫していないように感じられる各年代の直方の言説が、理気論把握自体は一貫していたということを解明している。第二章「仁に対する視点」では、朱子学および闇齋学派において「仁」について重要な言論と見なされている、北宋の儒学者張載の『西銘』に対する闇齋学派の講究態度を検討することを通して、闇齋学派の学風である「体認」という理解態度の形成について解明し、また、闇齋の仁の定義とも比較することで、直方が、仁を十全に発揮させる工夫の根本として居敬・主静という概念を強調していたという点を指摘している。第三章「智に対する視点」では、智に対する直方の理解構造について検討し、闇齋学派において特に重要視されていた「智蔵説」という徳性理解について、直方が「智蔵」を「敬」・「主静」と読み替えて理解していたことや、「智蔵説」を媒介に、仁智・動静・敬の概念が重層的に理解されていたことを解明した。これらの成果は江戸儒学の朱子学理解の研究に貢献するものと評価できる。

第四章「学問と著述に対する視点」で、従来あまり研究対象とされない「抄出書」を取り上げて考察を行った点は、評価すべきアプローチと言える。第五章「名分論に対する視点」では、「湯武放伐論」・「中国論」・「人物評価」という各議論をめぐって、そこでなされた言説の意図と背景にある思想構造とを検討し、直方の言説が理気の位相から理の位相へという視座をもって、偏説（学派的偏りのある学説）に立ち向かっていく性質のものであったことを解明している。

従来の直方研究においては、闇齋との対比によって、その純朱子学的性格が強調され、各論においての朱子学受容の様態についてはさほど言及されてはこなかった。本論文は、闇齋と闇齋学派の同時代の主要な門人との論争に注目しつつ、直方の朱子学受容とその理解構造について再検討を加えており、朱子学の東アジア的展開ならびに闇齋学派の研究に対する貢献は小さくはない。また、直方に対する評価には、純朱子学的と評価される一方で、禅学的であるとも評価されるという状況があったが、その評価の原因が直方の言説の特色と資料の性格によるところが大きいという点を指摘し、その上で直方の理解構造に一定の一貫性を見いだした点については、今後の直方研究の展開の指針となるものであり、さらに闇齋学派の研究にも貢献するものと高く評価できる。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認める。